

ペルテス病 lateral pillar C の治療

座長：西 須 孝

ペルテス病の最重症例である Herring Group C の治療について 4 題の発表があった。保存療法と手術療法が 2 題ずつであった。2004 年に Herring 自らが報告した米国における大規模前向き多施設調査の結果では、すべての年齢層において Group C に対する治療成績は、治療法のいかににかかわらず不良であることが多いという結論であった。これは、患者を治す立場の医師にとっては衝撃的なもので「ではどうしたらよいのか」という解決策が根本的に欠如した報告であった。我々に残された道は、米国の調査において検討されなかった「免荷」と既に否定された大腿骨内反骨切り術や Salter 骨盤骨切り術を超える「aggressive surgery」においてほかになかった。

中瀬雅司先生の発表された new pogo-stick 装具の治療成績は、約半数が成績良好 (Stulberg Class 2 以下) であり、過去に報告された手術治療と比較しても劣らないものであった。高橋祐子先生の発表された長期入院を伴う装具療法の、実に 75% が成績良好であり、本邦における手厚い医療制度を存分に生かした優れた治療法と考えられた。森田光明先生の発表された大腿骨内反骨切り術と骨盤骨切り術の合併手術は、今世紀に入ってから本邦のいくつかの小児病院で試みられてきた、より積極的な containment 療法である。半数を超える症例が成績良好であり、その有効性は評価されるべきものであるが、同時にこれが手術による containment 療法の限界ではないかと思われた。中西亮介先生の発表された内反回転骨切り術は、成人の大腿骨頭壊死に対する手術法をペルテス病に適用したものであり、海外の小児整形外科学会においてはあまり注目されていない術式であるが、成績良好例は 80% を超えていた。この手術は「回転」という名がつくため、杉岡式骨切り術にみられる技術的要求度の高い術式をイメージしてしまうが、座長の理解が間違っていないければ、これは関節外の骨切り術であり、小児整形外科医が積極的に取り入れてもよい術式ではないかと思われた。

ペルテス病において治療法の優劣を比較するとき、重症度評価 (Herring 分類) や治療成績評価 (Stulberg 分類) における検者間の相違が、不公正な判定をもたらしている可能性が拭い去れない。本学会においても、会場からこれに関係した発言があった。お互いを信用することは医学を進歩させていく上でとても大切なことであるが、一度全症例の X 線像を提示できる発表時間を確保して、徹底的に検証し議論する機会をつくってもよいのではないか、と思われた。